

古田史学の会・東海

東海の古代

第107号 平成21(2009)年7月

会 長：竹内 強

編集発行：事務局 〒489-0983 瀬戸市苗場町137-10

林 伸禧 〈Tel&Fax：0561-82-2140、メールアドレス：furuta_tokai@yahoo.co.jp〉

ホームページ：http://www.geocities.co.jp/furutashigaku_tokai

2009年度新役員体制について

会長を留任するにあたっての決意

古田史学の会・東海

会長 竹内 強

2009年度「古田史学の会・東海」の総会を6月28日(日)名古屋市市政資料館において行い役員体制はこれまでの体制を2009年度も引き続き維持することになりました。

総会終了後「古田史学の会」から古賀達也氏を迎えて講演会も行い古田史学の学問の方法論、最近の白雉年号の入った能面など興味深い題材が取り上げられました。

しかし、私は残念ながらこの講演を聴くことができませんでした。実は、その一週間前に大阪で行われた「古田史学の会」の総会最中に体調が崩れ、一時意識を失い救急車で病院に運ばれるという、とんだハプニングで今回の総会も医者から制限つきで出席許可を出してもらったという事態です。なんとか総会は終えたのですが、まだ検査のために病院通いが続いています。前会長の林俊彦氏のこともありますので身体だけには注意しなければと考えています。

ただそうしたこともあり、これまでの仕事からは離れることになりました。これからは、体調を整えることと古田史学に専念できるのではと思います。

古田先生は80歳を超えられても益々お元気に研究活動を続けられています。先生に負けないように私も、「継続は金なり」と言われるように拙いけれども古代史の疑問を少しでも解き明かすことができればと考えています。

皆さん方にこれまで以上にご迷惑をお掛けすることになるかとも思いますが、なにとぞよろしく願いいたします。

役 員	担 当	役 員	担 当	役 員	担 当			
会 長	竹内 強	会計担当	幹 事	磯田 和典	企画担当	監 事	横田幸男	—
副会長	林 伸禧	会報担当		田中 正一				
幹 事	加藤 勝美	会場担当		石田 敬一	広報担当			

古賀達也氏の講演についての報告

名古屋市 石田敬一

平成21年6月28日(日)に名古屋市市政資料館で行われた古賀達也氏(「古田史学の会」事務局長)が行った講演について報告します。

講演の内容は、第1部で「九州年号に関する最新の情報」について、第2部で「学問の方法論」についてであり、その発表の概要は次のとおりです。



<第1部>

九州年号に関する最新の情報について

- 1 九州年号は九州王朝説を支える根幹の一つである。
- 2 一つの王朝に一つの年号があるというのが基本原則である。中世の南北朝の王朝が分裂した時はそれぞれ年号を立てたものの、大和朝廷でも一つの年号が原則である。
- 3 年号は中国で始められ、日本はそれを輸入し利用している。
- 4 私が小さい頃には、大化が年号の始めて白雉、朱鳥、その後断絶した後、大宝以降ずっと年号が続いたと教えられた。
- 5 しかし、大宝以前に連続した年号があった

という資料がたくさんある。そうした資料の中で『二中歴』が最も有名で、その中の年代歴には、いわゆる九州年号が記載されている。

- 6 しかし、明治以降は『二中歴』はほとんど学問の対象とされていない。
- 7 新井白石は、この『二中歴』の古代年号は本物であるとしている。『新井白石全集』の巻末に水戸学の友人に古代年号を本物であるという観点から質問状を出している。また、鶴峯戊申は『襲国偽潜考』^{そのくにぎせんこう}で九州地方の豪族が造った年号説を発表している。なお、幕末から明治初期には『九州年号』という書物があったとされる。一方、貝原益軒は僧侶が勝手に造ったという偽作説である。このように江戸時代はさかんに九州年号について議論されていた、しかし、その後は九州年号についての議論がされなかった。
- 8 『失われた九州王朝』で古田先生が九州王朝の概念を提言された。九州年号は701年以前の九州王朝説の根拠の一つにされた、しかし歴史学会では九州年号について議論されてこなかったのもので、私たち「古田史学の会」では九州年号について国民に提示したいと考えてきた。それを同時代史料の金石文である、次のとおり動かぬ証拠で研究し確認してきた。
 - (1) 茨城県で出土した「大化五子年」(699年)と書かれた土器について、「大化」という年号が使われた資料として確認されている。
 - (2) 滋賀県で「朱鳥」年号が書かれた墓碑がある。
 - (3) 芦屋市で発見された木簡は「元壬子年」(652年)と記載されていることを私(古賀事務局長)が確認している。
- 9 「元壬子年」の木簡については、木簡学会では「三壬子年」と読んでいるが、奈良文化研究所の木簡データベースにおいて「三」の文字で三本線目の最後が上にはねるものはない。
- 10 つまり、この木簡は、「元壬子年」であり、西暦652年である。また、九州年号の『二中歴』の「元壬子年」は白雉元年であることから、この木簡は『二中歴』の記述に合致し

- ていることがわかった。
- 1 1 『日本書紀』の白雉元年は、650年であり、間違っている。
 - 1 2 この木簡と一緒に土器が出土し7世紀中頃と判断されており考古学でも時期が裏付けされている。
 - 1 3 なお、この木簡は紀年名木簡で2番目に古いものであるが、古田史学で「元壬子年」と主張するようになってからはこの木簡に言及される事が無くなった。それは研究者に意識されているからだと思われる。
 - 1 4 茨城県で出土した「大化五子年」の土器は、土器の専門家が7世紀末頃（7世紀中頃～8世紀中頃）と判断している。
 - 1 5 これらの3つの同時代資料である動かぬ証拠を学会に提示しているが、さらに、これら以外に新たな証拠、白雉二年が書かれた能面があるので、これについて紹介する。
 - 1 6 NO1レジメ右側にあるが、昭和42年朝日新聞の記事で、愛媛県西条市（伊予の越智の国）の福岡八幡神社にある能面について、地元の研究者の真鍋さんが裏側に「奉納 白雉二年九月吉日」と書かれていることを発表された。
 - 1 7 併せて「大永2年」（1111年）に奉納したと記載された能面も発見された。この能面の様式は編年に合致しており白雉二年奉納面が本物であることを傍証している。
 - 1 8 ただ、白雉二年奉納の能面が本当に同時代資料かどうかは文字だけではわからないので、実物を確認した。
 - 1 9 次の3点で本物との心証を持った。
 - (1) 神社はこの能面に文字が書いてあったことを知らずに、ほったらかしにしていたことから、後で記載したなどのでっち上げではないと思った。
 - (2) 日本人のメンタリティからして神様に奉納しているわけだから、嘘を書くことはないと思われるので偽物ではないと思った。
 - (3) この能面には奉納した者の名前がない。偽物であれば奉納者の名前を書いて体裁を整えるはずであるから、むしろ逆に偽物ではないという感覚を持った。なお、名前を書かなくてもわかる場合はいちばん偉い人、名前抜きで通用する人、つまり九州王朝の天子ではないかと思われる。
 - 2 0 これらの考えは私の心証である。
 - 2 1 そこで実物があるので本当にその能面が7世紀中頃より古い木であるかどうかをC14測定で明確にしたい。神社側は、もし古い能面ではなかったとしたらダメージがあると思うが、C14測定を宮司さんに粘り強く頼むつもりだ。
 - 2 2 実物が無くなっている九州年号資料も結構ある。黒田藩が作成させた地誌『筑前国続風土記附録』（加藤一純著）に「白鳳壬申年」と書かれた骨蔵器があったが、現在は行方不明である。
 - 2 3 近年、C14測定は精度も高く価格も安くなったので試したいと考えている。
 - 2 4 C14測定以外では白黒ハッキリ出来ないのかと言えばそうでもない。この越智の地方では白雉年間にいろんなことを行ったということがわかった。
 - 2 5 NO2のレジメだが、「古田史学の会・四国」の会員の今井久さんが『無量寺文書に見える九州年号』で、九州年号について記載された資料をまとめられた。
 - 2 6 越智の『聖帝山実報寺縁起』に「白雉二年に始めて一丈六尺の仏像を作り、そのほか千仏を刻む」とある。
 - 2 7 この縁起には、実報寺を開山した恵音の弟子の恵照が、白雉二年に大事業である仏像を造った事が書かれている。
 - 2 8 同じ白雉二年の奉納面は、この仏像を造った事業と無関係とは考えられず、文献史学と実物とが年代も地域も一致していることから信憑性が高いと考える。
 - 2 9 この縁起資料は有力な根拠であり、ますますこの白雉二年の奉納面が偽物ではないという理解に進んだ。
 - 3 0 しかし、その後二転三転と思考が変わり苦しんだ。というのはNO4上段のレジメだが、孝徳天皇白雉元年十月條に、『無量寺文書』の『聖帝山実報寺縁起』の一丈六尺の仏像を造ったこととそっくりの記述がある。
 - 3 1 この『聖帝山実報寺縁起』は、『日本書紀』の記述を知りながら聖帝山で自分たちが造っ

たと主張している。一方、『日本書紀』は、大和朝廷が造ったとしている。どちらかが間違いである。

3 2 レジメNO5であるが、孝徳天皇の40年前の『日本書紀』推古天皇十三年條にも、「始めて丈六の繡仏を造った」とあり、『日本書紀』は「始めて丈六の繡仏を造った」ことを2回書いており、『日本書紀』には間違いがある。嘘がある。

3 3 従って『聖帝山実報寺縁起』が正しい。

3 4 さらに、『聖帝山実報寺縁起』の方が『日本書紀』より確からしいことは、天平十九年の『大安寺伽藍縁起』資財帳にも同じ繡像の内容があり、越智天皇が造ったと書かれているが、越智天皇は大和朝廷にはいない。

3 5 つまり越智の国の『聖帝山実報寺縁起』の記述については、他の同じ内容を記述した資料からも裏打ちされている。

3 6 『日本書紀』の記述を利用して、自分たちが造ったという古代の伝承を正しく伝えているのは『聖帝山実報寺縁起』である。なお、越智天皇の越智は地域の名称である可能性がある。

3 7 レジメNO4上段に、孝徳天皇白雉元年二月條に千仏を刻んだ漢山口直大口が出てくるが、レジメNO5下段に、この山口直は法隆寺の仏像を造った人物であるとされており、実在の人物である。しかし、法隆寺は一切残さず焼けたので仏像は他から持ってきたものと考えざるを得ない。

3 8 『聖帝山実報寺縁起』にも千仏を刻んだとあり、とすれば山口直が造った聖帝山実報寺の仏像の一つが法隆寺に持ち込まれたと推測される。

3 9 NO4レジメの下段にあるが、白雉三年夏四月條に無量壽教を議くとして惠隱は実在の人物として記述されている。その弟子の惠照は白雉四年の遣唐使として『日本書紀』に出現する。

4 0 『聖帝山実報寺縁起』を書いた人は、『日本書紀』を読んだ上で自分たちが丈六の仏像を造ったと主張しているのである。

4 1 結論として、この白雉二年奉納面は孤立していない。越智は白雉年間に仏教的大行事

を行った地域であり、それが『日本書紀』にも現れてきているし、『大安寺伽藍縁起』にも出ている。全部、現地伝承と関係している。つまり、この白雉二年奉納面は本物であることを指し示している。

4 2 そして九州王朝の越智の国のことであるので、九州王朝説でない説明が付かない。

4 3 ただ、なぜ白雉年間652年から653年にかけて越智に仏教行事が多いのかという疑問がある。

4 4 それは九州王朝の副都である大阪の前期難波宮との関係で見れば、越智の国は、太宰府と前期難波宮の中間に位置しているだけでなく、また『今昔物語集』に越智の国は白村江の戦いの時にかなり活躍し、大勢捕虜になって帰ってきたことが書かれている。つまり越智は有力な九州王朝の臣下であったと考えられる。

4 5 それで、九州王朝のナンバーワンである天子は、越智の国のトップが天子に次ぐナンバー2である天皇を名乗ることを許したのだと考えられる。

4 6 なお、白雉年間の能面があるということは、九州王朝で古くから能があつた可能性を示すことにもなり、日本芸能史の通説の変更を迫る可能性がある。

(第一部終了)

<第2部>学問の方法論について

1 ドイツの学者アウグスト・ベークが提唱した「フィロロギー」は、古田先生の東北大学の恩師である村岡末次先生が日本に持ち込んだ。人間が認識したものを再認識するという学問である。たとえば『聖帝山実報寺縁起』を書いた人の気持ちになって、どういうつもりで書いたのかを考えるのが「フィロロギー」という学問である。

2 『聖帝山実報寺縁起』を書いた人は、『日本書紀』の記述を引用しながら、書紀編者と異なることを主張した。また「始めて丈六の繡像を造った」と2回記述した『日本書紀』の編集者の立場に立つと2回のどちらかが嘘である。そうしたことがわかったのは「フィロロギー」という学問の方法論を使ったからで

- ある。
- 3 犯罪捜査も同じである。犯人の気持ちになつて考えるのも「フィロロギー」である。
 - 4 歴史学では、反論できない人を対象に行うので、モラルを求められる学問であり、この「フィロロギー」を使わないと結論を間違える。
 - 5 九州年号群資料としては『二中歴』は、その内容が平安時代に遡る古い資料である。また大和朝廷の年号と無関係に書かれており、変更されていないと考えられるので優れている。
 - 6 ただ、『二中歴』には、大きな欠点がある。原型に近いと言われている『二中歴』では、他のほとんどの資料に最後の年号として「大長」があるが、『二中歴』には「大長」は無く最後は「大化」である。
 - 7 ありもしない「大長」という嘘をでっち上げる理由はどこにもないので、疑問として引っかかっていた。
 - 8 もしかしたら701年以降に「大長」という年号があったのではないかとアイデアを抱いた。
 - 9 十六世紀の辞書『運歩色葉集』に、柿本人丸が大長四年丁未（707年）に亡くなったと書かれているが、わざわざ嘘をつく必要がない。
 - 10 大長元年が704年で9年続くので713年が大長の終わり、九州年号の終わりと考えた。
 - 11 これは16世紀の資料でかなり新しいが実証である。しかし実証よりも論証である。たとえば、足利事件でDNAという実証があったが間違っていた。
 - 12 いかにも『日本書紀』に書かれていようが、その実証がいくらあっても嘘であると論証すれば『日本書紀』の記述は間違いである。つまり「学問は実証よりも論証を重んずる」のである。
 - 13 その論証は「フィロロギー」でできる。
 - 14 丸山晋司さんが九州年号を研究され、通称「丸山モデル」という九州年号を発表された。
 - 15 しかし、この「丸山モデル」はいろいろな九州年号を調べ、全数調査の結果、多数決で造られた。実証の寄せ集めである。
 - 16 「丸山モデル」は「朱鳥」年号が無く「大化」年号が繰り上がり「大長」年号が入っている。丸山氏は「朱鳥」年号は『日本書紀』編者のでっち上げで架空の年号であるとした。
 - 17 しかしこれは方法論上、間違っている。「数が多い方が正しい」というのは間違っている。化学の実験でも論理が必要で実験を行ったところ、その論理に合っていたらそれが正しいとする。
 - 18 大長元年は、私の説では704年、丸山説では692年である。そのほかの説もある。これらの資料を造った人たちの気持ちになつて考えると、大長年号を勝手に造ることはない。しかし歴史認識として大和朝廷は701年に大宝元年があるので、それまでの年号があったのだと考えたのではないか。それまでに九州年号を収まるようにしようとして、『二中歴』編者はスパッと700年で切ってしまった。その他の方法として、丸山モデルのように無理矢理、大長年号を700年までに押し込めた方法もある。
 - 19 『海東諸国記』を書いた人も701年からは大宝年号が始まるので、700年までに九州年号を押し込めた。というように私は考えた。
 - 20 これは論理的仮説であるが、私の仮説であれば、いろいろな文献の年号について全部、うまく説明できる。これが「フィロロギー」である。
 - 21 都合の良いものだけでなく、都合の悪い資料も大切な証拠であり、その実証について考えて論証することが大事である。論証とは難しいことではなく普通に考えて普通に理解できることである。
 - 22 学問的には実証よりも論証である。

(第2部 終了)

<質疑>

講演中や講演後に様々な質疑があったので、以下に整理しました。

Q1 「始めて」は、「開始した」という意味合

古代逸年号資料(1)

瀬戸市 林 伸禧

いもある。この時から開始したという読み取り方もあるのではないかとすると2回、「初めて」が出現してもおかしくないのではないかと。

A 1 「始めて」は文脈で判断するしかない。指摘された資料NO5の上段の線引き部分『大安寺伽藍縁起』の記述については、「三月に始めて、そして終わる」とするので、文脈上、「開始した」という意味で間違いない。冬10月から始めて春3月に作り終わったということから「開始した」というスタートの意味だと判断できる。

一方『日本書紀』の「始めて」の多くはファーストタイムの用例であり、文脈上「始めて繡仏を造った」の「始めて」についてもファーストタイムの用例として考える。

Q 2 筑紫舞との関係はどうか？筑紫舞は面を付けているか？

A 2 特に関係はない。筑紫舞は、訳あって面を付けないとされる。

Q 3 大化五子年の壺はどこにあるか？

A 3 茨城県である。

Q 4 無量寺文書には人皇三十七代孝徳天皇の御代などがあり、時代を特定するために権力者時代を記載している。白鳳元年と御世の両方が記載されているのはなぜか。

A 4 両方の物差しを書くことがあるが、それはすべて後代の資料である。紹介した同時代資料は年号だけしか書かれていない。

Q 5 大化子年は1年ずれるがどうか？

A 5 大化五子年は699年であるが、ある地方では1年ずれたカレンダーを使っているのではないと思われる。たとえば武蔵の国は1年ずれている。庚午年籍の庚午は670年であるのに対し武蔵国では辛未(671年)の年になっている。その地方だけ1年ずれているカレンダーの可能性はある。

Q 6 関東の地域だけがずれているのか？

A 6 関東だけとは限らない。

1 はじめに

古田武彦氏が唱える「九州王朝」の存在を証明するものに「九州年号(古代逸年号)」があります。その存在を証明するため、逸年号を採集しており、その採集状況を報告する。

なお、「九州年号」と称するのが一般的ですが、次の事由から、「古代逸年号」と称しています。

- ・古代(「大宝」以前)に使用された年号であること。
- ・いわゆる正史から排除された年号(逸年号)であること。
- ・九州王朝以外で使用されたと思われる年号も見受けられること。

2 古代逸年号の採集

古代逸年号は次により採集し、整理した。

(1) 採集方針

- ・大宝以前の年号と思われるものに限定して採集した。
- ・文献批判は一切せず、掲載されているものをそのまま採集した。
- ・大系・全集本、単行本で、同じ文献を掲載されている場合があるが、そのまま採集した。

(2) 採集した逸年号が第三者が簡単に検証できるよう、次の項目で整理した。

- ・文献の目次、逸年号が掲載されている文章及びその頁数。

なお、すべての逸年号を採集した書物に言えることであるが、文献のどの頁に逸年号が掲載されているかを確認することは非常に困難である。極論すれば、文献の1頁から最終頁まで、目を通すことが要求される。故に、「目次、頁数」の項目を設けた。

- ・逸年号、年数、年数干支、モデル逸年号、元年干支。
 - ・その他(天皇、探索者、所在地、発行者、発行年月日等)
- (3) 採集した逸年号(年号・元年干支)を取り纏めて、別表1のとおりとした。
- (4) 採集した逸年号は、次のように分類して

整理した。

- ・『群書類従』を始めとした大系・全集類。
- ・『二中歴』を始めとした年代記・王代記類。
- ・上記以外を地方別に区分した。

3 逸年号採集の参考書物

逸年号を採集するに参考とした書物を掲げる。

(1) 『古事類苑』歳時部

(復刻版：吉川弘文館、1995〈平成7〉年発行)

明治時代に編纂され、逸年号として関係文献及び逸年号(目次：「歳時部四一年号下(逸年号併入)」)が掲載されている。

国内(『二中歴』、『襲國僭先考』等)並びに朝鮮(『海東諸国記』)・中国(『清白士集』)文献が収録されており、逸年号掲載の文献を調査するに重要な書物である。

なお、『二中歴』で「兄弟六年〔戊寅〕」と記載されているが、正しくは異説の「兄弟一年〔戊寅〕」である。異説が掲載されていないので、留意する必要がある。

愛知県内の主要な公共図書館に収蔵されている。また、国立国会図書館の「電子図書館—近代デジタルライブラリー」に収蔵されており、インターネットで閲覧等ができる。

(2) 『日本私年号の研究』久保常晴著

(吉川弘文館、1967〈昭和42〉年発行)

逸年号ごとに、逸年号掲載の文献を数多く紹介している。

逸年号を私年号といい架空の年号と云っており、偽年号論者の根拠書物である。なお、丸山晋司氏が批判している。

また、『君台観左右帳記』には「聖徳六年戊巳」が掲載されている(122頁)とのことであるが、『群書類従』19輯上、『日本思想大系』23巻、『茶道古典全集』第2巻では確認できなかった。掲載されている書物をご教示頂ければ幸いである。

愛知県内では、愛知県図書館及び名古屋・愛知学院大学附属図書館に収蔵されている。

(3) 『市民の古代』第11集

(新泉社、1989〈平成元〉年発行)

「九州年号」目録として、表形式により逸年号ごとに纏めて掲載されている。

逸年号は、「善記」から「法興」まで33年号(「継体」は無し。)が掲載されている。

『市民の古代研究』等で報告された内容(逸年号、文献)を取り纏めたものである。

なお、印刷ミスがあるのでよく確認する必要がある。

また、古代逸年号をいろいろな観点から記述されており、古代逸年号を研究するのに必要な書物の1冊である。

愛知県内では、愛知県図書館・名古屋市鶴舞図書館に収蔵されている。

(4) 『市民の古代研究・合本一卷』

(新泉社、1992〈平成4〉年発行)

「市民の古代研究会」(解散して消滅)の会員が逸年号を発見・報告した内容が数多く掲載されている。また、丸山晋司氏が逸年号掲載の史料批判及び逸年号の原形を追求した連載があるほか、いわゆる丸山モデルと称される古代逸年号原形論を発表している。

(5) 『古代逸年号の謎』丸山晋司著

(アイピーシー、1992〈平成4〉年発行)

丸山晋司氏が『市民の古代研究』等に発表された古代逸年号論を纏めた書物である。

歴史学界で定説となっている偽年号論の根拠となっている久保常晴説及び所功説を批判している。又古田武彦説をも批判している。

逸年号の採集は少ないが、古代逸年号を研究するのに必要な書物の1冊である。

4 古代逸年号資料

(1) 『群書類従』編

今回報告する古代逸年号資料は『群書類従(正・続・続々)』から採集した逸年号である。

『群書類従』は多岐の分野にわたって掲載されており、逸年号を数多く採集することができた。

採集した逸年号は次のとおり取り纏めた。

①『群書類従』の輯数・頁数順により取り纏めた。なお、一部の項目については、今回印刷を省略した。(別表2-1)

②逸年号ごとに、元年干支・年数順に取り纏めた。(別表2-2)

なお、『甲斐国妙法寺記』(続群書類従30上)は、逸年号が掲載されている前半の文章が削除されている。

ひろば

『なかつた-真実の歴史学-』第6号

阿久比町 竹内 強

7月も中旬ようやく待望の書が手元に届いた。既に半年以上遅れていた古田武彦氏編集でミネルヴァ書房から刊行された『なかつた-真実の歴史学-』第6号である。この本は今号で一旦休刊になるとの事である。

古田氏が今著述している『「邪馬台国」はなかつた』ほか初期三部作の新訂本、『ミネルヴァ日本評伝選-卑弥呼』などをミネルヴァ書房より出版するとのことである。

今号は、そうした事もあり最近の古田氏の研究成果を総て載せている。金石文を九州王朝論からの解明、和田家文書「寛政原本」の出現とその分析研究、文字の伝来についての新解釈など、まさに古田氏の独壇場である。

更に、今号には特別付録がついている。昨年10月に愛知教育大学で開かれた「日本思想史学会」での古田氏の研究発表の様子のと、福岡県小郡市で行われた「九州(筑紫)の飛鳥」実証実験がDVDに収録されて付いてくる。

80歳を越えても古田氏の元気な姿を見ることが出来ます。

定価2200円+税は決して高くない。

訂正

以下の誤りがありました。
お詫びして訂正させていただきます。

- 「3-(4) 神宮社 社口社 天王社・御鋸社」を「(4)境内社」とする。又文中の「境内社は4社」は「境内社は5社」とする。
- 「3-(5)の「小山が気に」の後に「なりません。」を追加する。
- 「3-(5)」の次に「(6)」を追加する。
「(6) 木製座像「和志取神像」
和志取神社から北西へ数百mのところにある

蓮華寺から、延喜年間(901~923)作と伝わる木製座像「和志取神像」が明治21年に発見され、和志取神社に祀られています。

どんな神像なのか興味が湧くところですが実物は確認していません。

- 「7 矢作神社」の次の文を削除する。
「和志取神社から北西へ数百m……実物は確認していません。」
- 「9 猿投神社」について
 - 前書きを「(1)猿投山」とする。
 - 「(1)大碓命陵」を「(2)大碓命陵」に、「(2)猿投神社」を「(3)猿投3社」にする。

7月例会に参加を

日時：7月12日(日) 午後1時30分~5時
場所：名古屋市市政資料館(第1集会室)

Tel:052-953-0051

名古屋市東区白壁1丁目3番地

参加料：500円(会員無料)

交通機関

- 地下鉄名城線「市役所」駅下車、東徒歩8分
- 名鉄瀬戸線「東大手」駅下車、南徒歩5分
- 市バス「市政資料館南」下車、北徒歩5分
- 〃 「清水口」下車、南西徒歩8分
- 〃 「市役所」下車、東へ徒歩8分

駐車場

- 名古屋市市政資料館：12台収容(無料)
- ウィルあいち(愛知県女性総合センター)地下駐車場：南隣、有料(30分170円)
- 鈴木不動産コインパーク：南東角交差点の東、有料(40分200円)

今後の予定

8月例会：8月9日(日)名古屋市市政資料館
9月例会：9月13日(日)名古屋市市政資料館
例会は原則として毎月第2日曜日です。

古田先生とその学問に興味のある方ならどなたの参加も歓迎します。また参加に際し事前連絡は不要です。遅刻・早退もかまいません。

例会での研究報告、見解発表は大歓迎です。資料を配布される場合は、「18部」ご用意願います。